

「日本国憲法 9 条に込められた魂」(2022. 8. 21)

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ 5:9)

剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。(マタイ 26:52)

2022 年 8 月 7 日は平和聖日である。当教会では礼拝の中で、「平和の祈り」(連禱)を平和の主に捧げた。たまたま、H.Y 兄の「思い出すこと」という土崎空襲についての体験談が手元にあり、その出だしを会衆と共に聴いた。その場において体験した者だけが証しできる凄まじい爆撃、爆音、不気味な明るさ、死体…。平和な時代を生きてきた私にもそれは伝わってきた。

この前日 8 月 6 日、広島平和記念式典にグテーレス国連事務総長が出席し、次のような挨拶をした。「新たな軍拡競争が加速している…人類は、実弾が込められた銃で遊んでいる…広島の恐怖を常に心に留め、核の脅威に対する唯一の解決策は核兵器を一切持たないことだと認識しなければなりません。」現在の国連に失望する声は大きいですが、それでもその国連を代表する方がこのような平和へのビジョンを抱いていることを知り、素直に嬉しく思った。



『日本国憲法 9 条に込められた魂』(鉄筆文庫)という本がある。この中に、GHQ のマッカーサーに当時の首相幣原(しではら)喜重郎が戦争放棄を提案した経緯を、衆院議員だった平野三郎が聴取した、いわゆる「平野文書」が付録としてある。その中で、平野は、「軍隊のない丸裸の状態に敵が攻めてきたらどうするんですか？」と遠慮なく問いかけていくのだが、その返答の中で、幣原は、「非武装宣言ということは、従来の観念からすれば全く狂気の沙汰である。だが、今では正気の沙汰とは何かという事である。武装宣言が正気の沙汰か。…何人かが自ら買って出て狂人とならない限り、世界は軍拡の蟻地獄から抜け出すことができないのである。…世界史の扉を開く狂人である。その歴史的使命を日本が果たすのだ。」

ロシアのウクライナ侵略で、ウクライナは欧米の支援を受けながらも、専守防衛の戦いを強いられている。その戦況を見て、日本においても世界においても新たな軍拡競争が加速している。まさに軍拡の蟻地獄に自ら落ち込んでいくようなものである。このような時だからこそ、あの廃墟の中から、唯一の被爆国として、戦争放棄と武力の威嚇・行使を永久に放棄すると宣言した悲壮なる決意に思いを馳せたいと思う。